

合同教育研究全道集会2025<第20分科会 障害児・障害者の教育と福祉>

第20分科会は現地とオンラインのハイブリッドで開催し、3つの分散会に分かれてレポートをもとに討議を深めました。

<第1分散会>現地6名、オンライン1名の参加者で3本のレポート発表がありました。

片山先生のレポートは普通高校から転勤されてすぐに担任になり、周りの先生と協力をし、行動が変わったり、不登校の生徒が卒業に参加できるなど子どもの本当の願いを聞くことで、子どもが大きく変わる原動力となる感動する実践報告でした。居場所作りを大切に取り組んでいるレポートでした。

小学校特別支援学級の実践レポートでは、暴言を吐く児童がいるが、その背景には隠されている思い（茶々をいれる、目立ちたいなど）があり、一対一で話すといい子であることから、教室場面でも活躍する場面を設定することで論議になりました。教材についても、児童の興味関心にあった教材や教師の熱量が伝わるなどの意見があがりました。

長嶋先生のレポートはコミュニケーションに関わる実践レポートでした。本当のコミュニケーションはお互いの気持ちを汲み取ることで、周囲の教師との関わりの中でその余裕を持たない難しさも感じると話されました。

担任をしていた時と、担任外の時の見え方の違い、判化する、できることを増やすことの意味について交流を深めました。子どもの文化と教師の文化をどう擦り合わせていくのか、今、子どもの持っている発達を軸にどのように成長を促すのか深めることができました。

<第2分散会>現地6名、オンライン2名の参加者で4本のレポート発表がありました。

1本目のレポートは特別活動の実践について、2本目のレポートは3人の生徒の実践の報告から教員間の対話の必要性、どう同僚性を築いていくのかについて、3本目のレポートは心地よい指導支援を目指し3名の児童の実践から、4本目のレポートは専門学校で課題を抱えたまま、進学してきた生徒への指導について語られました。

4つの実践を通して特別支援の共通した課題が見えてきました。「誰の支援なのか?」。現状では、教師のこうあるべき、自発的主体的という言葉に置き換えられてしまっていないかという疑問が挙げられました。その流れから外れることで、自分も同僚から強い指導が当然のように行われるべきだと要求されているのではないかという疑問に繋がっていることが語られました。子どもの権利条約や子どもの要求をどう組み立てていくのか、発信していくのか、安心・安全を広げていくことを柱として、実践を積み重ねていくことの大切さを確認しました。

<第3分散会>現地10名、オンライン1名の参加者で3本のレポート発表がありました。

1本目のレポートはICTに関わるレポートで、クリエイティブな活動が阻害される傾向や個人情報漏洩などの不安要素への整理もなされない中、とにかく使ってみようという風潮に、本当にICTを使うことに意義があるのか、立ち止まって見つめ直す必要性があるのではないかと語られました。

2本目のレポートは今の自分の現状など語られ、弱みは捉え方で強みになること、今の職場では適応主義が蔓延し、発達保障について語られる機会がほとんどないことへの危惧を話されました。

安里先生のレポートは保護者の了承を得て、今では少なくなった子どもの写真や様子を見ながら実践について語りました。子どもの様子を見ながらレポート発表され、より子どもの様子を感じながら議論を深

めることができました。レポートに対して参加者から「初めと終わりの区切りの動きをいれてはどうか」というアドバイスがあったり、共同研究者から澱粉作り、ハシゴ作りなど ICT ではなく、実際に体を使った活動を通して言葉が出てきたという過去の実践が共有されたほか、手を叩くなど一見直した方がよいとされる行為も実は本人にとってはセロトニンが出るなどメリットのある行動であり、見方を変えることで実践が変わってくることなど子どもの行動に対するとらえ方を見直す大切さを改めて確認することができました。

今回、参加はできませんでしたが、市橋さんのレポートはそれぞれお土産として持ち帰り、各自でその実践に触れていただきました。

3 グループそれぞれ、1 本のレポートにじっくりと時間をかけて交流することができ、今までの自分の実践の振り返る良い機会となりました。